

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 朱 薇娜

論文題目 能動的及び受動的意味を表す日本語の機能動詞結合の研究

論文審査担当者

主 査	名古屋大学教授	杉村泰
委 員	名古屋大学教授	玉岡賀津雄
委 員	名古屋大学准教授	秋田喜美

本論文は現代日本語における能動的及び受動的な意味を表す機能動詞結合について論じたものである。日本語には、「影響する」に対する「影響を与える」や、「誘われる」に対する「誘いを受ける」のような迂言的な表現が存在する。これらの表現における「与える」や「受ける」などの動詞の部分は意味が稀薄化し、文法的な役割を担っている。本研究では「与える」と「受ける」などの対立をめぐる、「影響を与える」、「考察を加える」、「誘いをかける」のような能動的意味を表す機能動詞結合のグループと、それと対立する「影響を受ける」、「迷惑をこうむる」、「注目を浴びる」のような受動的意味を表す機能動詞結合のグループに焦点を当てて考察している。

[本論文の概要]

本論文は、序論の章と結論の章を含め、全部で 6 章からなる。

「第 1 章 序論」では、機能動詞結合構文と対応する動詞構文の関係について「包含関係」、「逆包含関係」、「一部対応関係」、「対応関係」、「補充関係」、「動詞構文の欠如」の 6 つに分けたうえで、本研究では機能動詞結合構文における動詞の要素と名詞の要素を分けて考察することや、中国語の形式動詞と対照して考察することを述べている。

「第 2 章 先行研究及び援用する諸概念」では、まず機能動詞の定義や機能動詞の全体像を記述している村木（1991）を概観し、機能動詞の種類や特徴を整理している。次に、動詞構文と機能動詞結合構文の特徴を見るために、他動性の高低を測る 10 項目のパラメーターや、多義語の中心義の認定方法及び意味拡張の動機づけについて論じている。

「第 3 章 能動的意味を表す機能動詞結合構文」では、「与える」、「加える」、「かける」の 3 語の機能動詞結合構文について考察している。これらは「影響する」に対する「影響を与える」、「暴行する」に対する「暴行を加える」、「磨く」に対する「磨きをかける」のように単一の動詞で表しうる意味を「名詞＋格助詞＋動詞」で言い表す表現である。これらの動詞構文結合は「NP1 ガ NP2 ヲ/ニ VN スル/DN ル」という統語構造を持ち、対応する機能動詞結合構文は「NP1 ガ NP2 ニ VN/DN ヲ FV」という統語構造を持つ。考察の結果、「与える」、「加える」、「かける」には次の特徴があることを明らかにした。

機能動詞結合構文の「与える」は、他動性の高い語（外的活動、言語的活動）と共起する場合は、二格にヒト名詞をとりやすく、「与える」の基本義が生かされている。一方、他動性の低い語（心的活動、好ましくない影響）と共起する場合は、「感動を与える」や「誤解を与える」のように使役のマーカ―の機能を果たしている。

機能動詞結合構文の「加える」は、動作主性の高いものが主語に立ちやすく、他動性の高い構文となる。「一撃」や「刺激」のような力的作用を表す語と共起する場合は、機能動詞結合構文と動詞構文の基本形は基本的に置き換えられ、対応関係をなしている。一方、「検討」や「改善」のような知的作用を表す語と共起する場合は、「加える」の基本義に基づいた「対象の上にさらに/新たに」という〈追加〉の意味が前景化しやすく、2 つの構文は一部対応関係をなしている。

機能動詞結合構文の「かける」は、動作主性の高いものが主語に立ちやすく、他動性の高い構文となる。対応する動詞構文は対象に直接的に動作/変化を加えることを表すのに対し、機能動詞結合構文は動作主から対象への働きかけのプロセスを際立たせる機能がある。（例「{ボール/椅子/エンジン/体 etc.} を回転させる」vs. 「{ボール/*椅子/*エンジン/*体 etc.} に回転をかける」）。また、他動性の低い心的活動を表す語と共起する場合は、「期待をかける」のように動作主自身に内在する感

情を表す場合と、「心配をかける」のように他者の感情を表す場合があることなど指摘している。

「第4章 受動的意味を表す機能動詞結合構文」では、「受ける」、「こうむる」、「浴びる」の3語の機能動詞結合構文について考察している。これらは「影響する」に対する「影響を受ける」、「迷惑する」に対する「迷惑をこうむる」、「非難する」に対する「非難を浴びる」のように単一の動詞で表しうる意味を「名詞＋格助詞＋動詞」で言い表す表現である。考察の結果、「受ける」、「こうむる」、「浴びる」には次の特徴があることを明らかにした。

機能動詞結合構文の「受ける」は、「攻撃を受ける」のように働きかけてくる側と、それを受ける主体との二者関係の上に成り立ち、「攻撃される」のような受影響受動文と対応する。「受ける」は、「影響を与える/受ける」、「打撃を与える/受ける」、「感銘を与える/受ける」のような能動的な「与える」と受動的な「受ける」のペアが存在し、「こうむる」や「浴びる」に比べて生産性が高い点で特徴がある。また、「受ける」を用いた語彙的受身文とレル・ラレル形の文法的受身文の対応関係は動詞の統語構造の影響を受けていることを明らかにした。

機能動詞結合構文の「こうむる」は、「損害、不利益、損失、被害、苦痛」のように〈不利益〉を表すものと、「惨禍、原発事故、災い、災害、戦災」のように〈災害〉を表すものと共起し、文法的受身文とは対応しない。また、コーパスからの出現数は少ないものの「怒りをこうむる」、「咎めをこうむる」など時代小説における古めかしい表現や、「変化をこうむる」、「変容をこうむる」など外部の影響を受けて生じた変化や変容を表す特殊的な表現も見られる。

機能動詞結合構文の「浴びる」は、「非難、批判、喝采、称賛」など人間の言語的活動を表す語、「注目」など人間の視線を表す語、「連打、銃撃、洗礼、本塁打」など人間の外的活動を表す語とよく共起し、文法的受身文や「受ける」を用いた語彙的受身文と置き換えられることが多い。また、「浴びる」は多数のヒトからの行為、または連続的な行為を受けることをデフォルトとしている点で「受ける」や「こうむる」とは異なっている。

「第5章 中国語の形式動詞と日本語の機能動詞の対照」では、中国語にも“加以＋動詞”（～を加える）や“进行＋動詞”（～を行う）のような形式動詞があることを指摘して、日本語との対照を行っている。その結果、中国語の形式動詞は目的語前置を標示する機能があり、文法化の程度が高いのに対して、日本語の機能動詞は意味が完全に希薄化しているわけではなく、語結合において基本義が生かされており、中国語に比べて文法化の程度が低いことを指摘している。

「第6章 結論」では、本研究の分析結果をまとめ、残された課題について論じている。今後の課題としては、①動詞構文と機能動詞結合構文の継承についてさらに詳細に見る必要があること、②「出す」、「食らう」などの他の語も考察して能動的及び受動的な意味を表す機能動詞結合の全体像を明らかにする必要があることなどを述べている。

[本論文の評価]

本論文は従来あまり議論されていない機能動詞結合構文の統語的・意味的特徴について、対応する動詞構文との違いから詳細に分析している点で優れた論文である。とりわけ、以下の各点において審査委員から高く評価された。

- 1) 先行研究であまり扱われていない機能動詞結合構文を研究対象とし、統語的・意味的特徴が詳細に記述されている。
- 2) 受動的機能動詞結合構文と受動文の違いを見ることにより、日本語における受動文の研究に示唆

を与えている。

3) 機能動詞結合構文における動詞の要素と名詞の要素を詳細に見ることにより、日本語における機能動詞結合構文の研究方法に示唆を与えている。

一方、審査員から以下のようなコメントもあった。

1) 機能動詞の認定基準について、先行研究よりずっと精密なものになっているものの、さらに精度の高いものにする必要がある。

2) 機能動詞構文しか使えない場合の特徴を明らかにし、機能動詞構文の存在意義を追究する必要がある。

3) 日本語に比べて中国語の方が意味が希薄化している点について、今後より詳しく説明を加える必要がある。

このように本論文には、不十分と思われる個所も見られる。しかし、本研究で行った研究は先行研究の指摘を十分に超えるものであり、日本語研究において重要な位置を占めるものである。全体的に見た場合、本論文は論旨が整然としていて、完成度の高い優れた論文である。

以上の評価に基づき、審査委員全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。